

花田裕子論文内容の要旨

主 論 文

Association between Mothers' Concern about Child Rearing and Their Parenting Stress

母親の育児に関する気がかりと育児ストレスの関連性

花田 裕子 本田純久 得丸尊子 小澤寛樹

(ACTA MEDICA NAGASAENCIA ・ 51 巻 155—200 2007 年)

長崎大学大学院医学研究科内科系専攻
(指導教授：小澤寛樹 教授)

緒 言

児童虐待の認識が広く浸透して年々通告件数は増加しているが、児童虐待は予防と早期の発見が重要であり、児童福祉法改正になどの改正に伴い市町村レベルでの取り組みは始まったばかりである。育児ストレスは、重要な虐待要因であることは多くの研究結果が示している。育児は日々の行為であり、そこから生じるストレスは、多様な日常ストレスの蓄積となる可能性がある。そのため、母親が認識している育児上の心配や不安は、さまざまな育児に関するストレスの表層部である可能性がある。本研究の目的は、幼児を育児中の母親が認識している育児に関する問題と、育児ストレスの関連性を明らかにする目的とした。

対象と方法

対象：2ヶ所の幼稚園に子どもを通園させている母親 222 名を対象として、調査用紙を配布。157 名から回答があり回答率は 71%であった。未回答の多い回答 1 名、母親の年齢が未記入 1 名、実母以外の回答 3 名を除いた 152 名を解析対象とした。母親の年齢は、平均 33.9 歳 (SD=4.0) 範囲は 23 歳から 43 歳であった。

期間：2004 年 10 月～11 月に調査を実施した。

方法：育児に関する心配・不安は、自由記載として、育児ストレスは米国の Abidin¹ によって 1986 年に開発された Parenting Stress Index(PSI)を 1999 年に奈良間ら⁹が作成した日本語版を使用した。PSI は 1 ヶ月から 12 歳までの子どもを育児中の親を対象とする調査用紙である。

質的分析：記述は記載内容から意味を持つ文章、言葉を 1 単位としてそれぞれにケース番号を付けて KJ 法によってカテゴリー化した。カテゴリー化は、筆者と看護師 (臨床経験 20 年 幼稚園勤務看護師経験 2 年) の 2 名で検討して合意により行った。

量的解析：6つのカテゴリーと PSI の各下位尺度及び子どもの特徴の関わるストレス総得点、親自身に関わる総得点、PSI 総得点の中央値 (最小値-最大値) を心配・不安「あり群」と

「なし群」別に求めた。心配・不安「あり群」と「なし群」の間で PSI の各下位尺度、PSI 子供尺度合計得点、PSI 親尺度合計得点および PSI 合計得点を Wilcoxon の順位和検定によって比較した。

倫理的配慮：2つの幼稚園の管理者に調査目的を口頭および文章で説明して協力の承諾を得た。母親に、研究の目的とプライバシー保護について明記した文章を質問紙に同封した。回収は幼稚園に回収ボックスを設置して留め置き法とした。回答をもって調査の同意とした。本研究は、長崎大学大学院医歯薬学研究科倫理委員会で審査を受けて承認を得た。

結 果

本調査で、育児の心配・不安についての自由記載は、152名中75名と回答者の約半数であった。育児に対する不安や心配について自由記載の質的分析は、親自身に関する心配・不安を、「自分をコントロールできない」、「育児に自信がない」、「仕事と育児の葛藤」の3カテゴリーに、子どもに関する心配・不安を「将来・学力の不安」、「扱いにくい子供」、「発達・健康に関する問題」の3カテゴリーとなった。子どもに関する心配・不安のカテゴリーと、PSI 合計得点は「不安・心配」を記載した親としなかった親に有意差は認められなかった。「扱いにくい子ども」を記載した人は、記載しなかった人に比べ PSI 子ども尺度合計得点が有意に高かった ($P =$)。親自身に関する心配・不安のカテゴリーと PSI 得点は、「自分をコントロールできない」を述べた人、および「育児に自信がない」を述べた人は、それらの心配や不安を述べなかった人に比べ PSI 合計得点が有意に高く ($P =$)、子どもに関する下位尺度4尺度、親自身に関わる尺度下位3尺度と多くの下位尺度が有意に高い得点であった。「仕事と育児の葛藤」を述べた人は、述べなかった人と PSI 合計得点に差はみられなかった ($P =$)。

考 察

本研究で、育児の心配・不安についての自由記載は、152名中75名と回答者の約半数であった。自由記載であるにもかかわらず、育児中の多忙な母親の2～3人に1人が「書く」ということは、育児ストレスに悩んでいる母親が多く、本研究の調査結果に共通する内容は、子どものしかり方しつけが分からないであり、乳幼児期を通してペアレンティングの必要性を示唆していた。子どもに関する心配・不安の記載の「扱いにくい子ども」は12名あった。これは幼児期の発達段階から、幼児を育児している母親特有のカテゴリーであるといえるが、発達段階として捉え対応できずに、子どもをネガティブに認知する母親は、子どもの良くない行動に指針的な反応を教えるしつけが少なく、力に頼るしつけや放置する傾向が高いことという研究結果もあり、扱いにくい子どもにどう対処しているかは、今回の調査内容には含まれていないが重要な点である。「自分をコントロールできない」に含まれた記載内容は、身体的あるいは心理的虐待のハイリスク群と考えられる内容であった。

「扱いにくい子ども」のみが PSI と相関があり、「扱いにくい子ども」のカテゴリー内容と PSI 下位尺度の内容とも類似していた。また、「扱いにくい子ども」の記載があった親は、親自身に関するストレスでは＜抑うつ・罪悪感＞得点が有意に高く、親自身ははっきりと自覚していなくても、子どもへの対応の困難さから抑うつ状態になっている可能性やしかり方が過剰になり罪悪感を持っている可能性が考えられる。親自身に関する心配・不安は、多くの母親が持っていて PSI と相関があった。特に「育児に自信がない」母親は、抑うつ感がありソーシャルサポートが不足して、親としての有能さの自己評価が低いことが分かった。「育児に自信がない」母親と「自分をコントロールできない」母親は、ともに育児支援が重要な対象群である。児童虐待予防には、養育態度を直接問うと虚偽の回答の可能性があるため、抑うつ、ソーシャルサポート、ストレス管理の調査によってスクリーニングするほうがより確実な回答を得ることが示唆された。今後は、対象を広げてストレス、抑うつ及びソーシャルサポートと児童虐待傾向の関連について調査していくことが課題である。